**青島と神話**

日本神話には、天照大神が孫のニニギを天から降ろして天下を治めるという天地創造神話に続く伝説があります。この一連の物語は天皇家の神系を確立するもので、ニニギは木花咲弥姫と結婚し、3人の子供を産みます。その中には、狩猟の名人となった山幸彦と漁の達人となった海幸彦の兄弟がいます。ある日、山幸彦は2人の道具を交換してお互いの商売を知ろうと提案します。山幸彦は兄の釣り針で釣りに出かけ、海幸彦は狩りに挑戦します。ですが、山幸彦は借りていた釣り針をなくしてしまい、どんなに探しても見つかりません。落ち込む山幸彦に塩椎という老人が訪ねてきて、海の神である綿津見の宮を探せと言います。

山幸彦は言われた通りに行動し、綿津見の宮で海神の娘・豊玉姫と出会います。2人は恋に落ち、2人の結婚は海と陸の結びつきを象徴するものになります。ですが、3年間綿津見の領地で過ごした山幸彦は、ついに見つけた兄の釣り針を持ち帰るために故郷に帰ることを選びます。山幸彦は鮫に乗って岸まで行き、家出の原因となった兄弟間の対立に決着をつけます。山幸彦と豊玉の間には息子が生まれますが、この息子は後に神話上の初代天皇である神武天皇の父となります。

青島神社は、山幸彦、豊玉、塩槌を神格化して祀っています。毎年1月の第2月曜日に行われる例大祭は、山幸彦が海神の宮殿から帰ってきたときに、鮫に乗った山幸彦の上陸を群衆が大喜びで迎えたと言われる光景を再現するものです。ふんどし姿の参加者は、冷たい波の中に駆け込んで身を清める儀式を行います。また、地域の伝承では青島は山幸彦と豊玉が初めて目を合わせた場所とされており、地元版の神話では、この彼らの出会いの場は「鴨が冬を越す場所」と表現されています。これが青島神社の古名の1つである「鴨就宮」（「鴨が休む神社」の意）の由来となっています。